

続いて秩父宮会の初期活動について一九五三年に行われた顕彰事業と秩父神社への分祀運動の二つに分けて分析を試みた。同年の顕彰事業としては秩父宮家からの下賜品配布や秩父宮文庫の設置、植樹活動、秩父宮の五十日祭・百日祭への参加、山岳連盟中心の胸像作成への参画等が挙げられるが、本発表では下賜品配布と文庫設置について考察した。

秩父宮の葬儀の際参列者たちに下賜された菓子は、秩父宮会によって複製量産され秩父郡市の全世帯に配布された。下賜されたモノを分かつことによって秩父宮と地域との関係性を語る言説が確認されたが、その実行に当たっては地方自治体の戸籍調査等のシステムを使用しての頒布が行われた。

次に秩父宮文庫設置について考察を試みた処、国会図書館運営委員長から秩父宮会宛てに文庫設置要請が為される史料が確認されたが、この書き手は秩父宮会の顧問も兼ねており、様々の政治主体の相互関係の中で設置運動が行われていたことが指摘できる。この史料では他に昭和天皇の成婚記念事業を行った図書館の事例を引いて、その成功がたたられており、まさに地域振興の文脈を前景化させる意見も看取された。

そして一九五三年十月前後から具体化する秩父宮祭神化の展開についても検討を行った。秩父宮会が発足当初から行ってきた宮家への分霊の要請が十一月に許可され、秩父神社への合祀過程が見て取れたが、更なる検討を要するものであり、今後の課題としたい。

以上、秩父宮会の初期活動は地方自治体の首長らを中心とする皇族崇敬運動であり、特徴として皇族の神社合祀による神格

化と、その顕彰活動と地域振興の密接性が挙げられた。戦後の天皇崇敬が後景化する時代状況の中での皇族崇敬を同時代における選択的な崇敬の可能性として位置付けることができた。

近代中国仏教における末法思想と亡国論の関係について

エリック・シッケタンツ

中国仏教研究において、清朝にいたると、仏教が究極的な衰退または墮落の状態に陥ったとされている。しかし、仏教の墮落が主張される一方、仏教の当時の社会に対する絶大な影響力も認められている。これは、清末の中国仏教が墮落していたという発想を批判的に問う余地があることを示す。

現代の研究者のみならず、清末期や中華民国期の多くの中国人仏教者も仏教を墮落したものと見ていた。彼らは、「末法」概念を使用して、仏教の現状を嘆いていた。ただ、このような末法意識の存在自体は驚くべきことではない。仏教の最終的な墮落という発想は従来から仏教思想の基礎的な構成部分である。なお、清末の仏教者たちに表現された戒律弛緩、弟子が師匠に従わない問題、僧侶の俗化などの嘆き、これらは仏教現状批判の決まり文句だともいえる。東アジアでは末法概念が仏教の改革と新しい思想の誕生の刺激となっており、仏教の墮落を主張する末法概念は現状の客観的確認より、内部から仏教の改革をうながす思想的措置である。

しかし、清末・民国期に唱えられた末法思想と仏教墮落の言説にはこの従来の末法思想と異なる側面があった。当時の末法思想は中国が滅んでしまうという危機に直面しているという亡

国論と共存していたことに注目すべきである。西洋列強の侵略を背景として、この亡国意識は当時の多くの思想家たちが共有していたものであり、彼らは中国が「瓜分」されてしまうと恐れられていた。亡国の危機と政治情勢は当時の思想界の根本を形づけた。清末において、仏教の墮落もこの亡国という大きな枠組みのなかで位置づけられていた。

末法という仏教に対する危機と亡国という国に対する危機が並行して考えられていたため、仏教の改革や復興の思想も中国全体の改革や復興と関連させられた。当時の思想界では改革や革命という政治目的のための仏教思想が唱えられ、仏教が中国の復興と近代国民国家の形成というナショナルイズムの物語のなかに統合されていたことを示している。仏教者自身の末法思想と仏教墮落論も、国が衰退・墮落する主体としてそのなかに密かに想定されていた。世俗的な知識人たちのみならず、仏教者自身においても仏教復興を救国策の一部としてなすとげるという考えが見られる。

清末において、従来の仏教そのものを主体とした末法思想は亡国危機の背景の下、当時形成されつつあった近代国民国家概念と結合したのである。そのなかで、中国の救国が最終目標となり、中国という国家がこの墮落言説の真の主体として現れた。清末にさかんに唱えられた末法思想や仏教墮落を理解するためには仏教内部の状況のみならず、当時の政治情勢全体を視野に入れる必要がある。そうすると、当時末法思想がさかんに唱えられた要因の一つとして、亡国危機論を指摘することが可能となり、国民国家とその復興をその主体とする末法思想を

通じて、仏教を当時形成されつつあった近代国家という枠組みのなかに位置付けることも可能となる。

井筒俊彦におけるの禅思想とその理解

ファン・ホセ・ロベス・パソス

井筒の禅思想を深く理解するためには、彼が父親から受けた影響に言及しなければならない。彼は幼少の頃から、父親に公案集の読書や「心」という文字の書写とともに坐禅をさせられたりする中で、禅の修行や教えを学んだ。父親の教育が厳しかったためか、井筒は父親に反発し、次第に東洋思想から距離を置くようになり、西洋の哲学や言語に関心を抱くようになった。それでも幼少時に体験した禅の修行が、その後の彼の宗教哲学研究に大きな影響を与えていた。具体的には、西洋哲学の中でも禅思想に最も近いと思われる神秘主義やイスラーム存在一性論に注目した。言語への学的関心も彼自身の禅理解と密接に関わっていると言えるであろう。

彼は鈴木大拙に続いて、一九六七年にスイスで開催されたエラノス会議に、東洋思想の中でも特に禅思想について講演するために招かれた。イスラーム思想を中心として研究を行っていた井筒は、エラノス会議の主催者の要請もあり一九八二年まで一二回、禅思想を中心として東洋思想について講演を行った。それらの講演の中で、講演テーマとして禅思想を取り上げたものが五つあるが、そのほか、インド思想や中国思想に関する講演の中でも、しばしば禅思想を論じている。エラノス講演が契機となって、井筒は改めて学的関心事として東洋思想の構造を